

日本におけるロールズの受容 ——その一素描——

福間 聡

本発表は、ジョン・ロールズ（1921-2002）の哲学が日本において（1970年代から現在）どのように理解されてきたのかを、日本の文化、政治、そして経済との関連において説明することを試みたものである。まずはロールズ哲学の基本的な枠組みと、日本における西洋哲学受容の背景について概説したうえで、日本におけるロールズ研究は哲学者や倫理学者ではなく、経済学者や法学者によって開始された理由を説明した（第1-2節）。また経済学者によるロールズの主著『正義論』の邦訳に問題が多かったため、政治家や法曹・NGO関係者を含んだ多くの日本人にロールズの思想は周知されることなく、研究者のみが知る哲学者となってしまった事態を解説した（第3節）。80年代以降、哲学者・倫理学者においてもロールズ、そして『正義論』の研究は盛んになったが、その対象は方法論や社会制度を論じている第一部と第二部であり、善の問題や道徳心理学を検討している第三部では無かった点において不十分であったという私の見解を示した（第4-6節）。今世紀に入っても日本の経済は停滞し続け、社会格差は拡大する一方だが、そんな中、ロールズの政治哲学に市民の目が向かう契機となった三つの出来事（政権交代、M. サンドルによる『正義』講義のテレビ放映、『正義論』の新訳）を述べ（第7節）、最後に、将来の日本におけるロールズ研究のあるべき姿を——理論面と実践面において——提起した。